
レモンパイ

尚子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レモンパイ

【Nコード】

N2940C

【作者名】

尚子

【あらすじ】

名探偵コナン18巻より。レモンパイの話を広げました。帝丹中学3年生、麻美先輩と1年生の工藤新一。同じく毛利蘭が主な登場人物です。

1. きっかけ

「なんかマジイッスよ、これ…」

彼の一言で、部室内の空気が一瞬静まりかえった。

「な…何言ってるんだよ一年坊主が！」

私の同級生、原口くんが、彼の頭を叩いた。

「いつ、いいのよ、えっと…工藤君だよね？ごめんなさい、口に合
わなかった？」

「いやいやいや！うまいって、うめえよ麻美。新一の味覚が可笑し
いだけだよ。」

ははは、と乾いた声で笑って、

私の作ったレモンパイを食べる原口くんの口元が、若干ひきつったような気がした。

「そうっスか？俺的には微妙な苦味があるような……。」

「おい、新一！ぐだくだ言ってるねえでさっさと片付けてこい！」

「……ういっす。んじゃあ、みんな行こうぜ！」

「バカかお前！今日はお前一人で片付けだ！」

「え！？なんで俺だけっ…！」

「ぐだくだ文句言ってる罰だ。」

「……ういっす。」

工藤君は

「マジイ」と言っていたレモンパイの最後の大きな一欠片を口に放り込み

頭をかきながら運動場へと走って行った。

…マズかったのかな？

昨夜、テニス部のみんなに食べてもらおうと
レシピを見ながら試行錯誤して
レモンパイを作っていたら
大量に焼きあがってしまった。

それで、サッカー部にもおすそわけする事にしたのだが。

工藤君の感想をふまえて、レモンパイを食べているサッカー部のみんなを再び見回してみた。

みんな

「おいしい」と笑みを浮かべている。

結局最後まで

工藤君の他に、

「マズイ」と言う人は、誰もいなかった。

2. お人好し

部活の後片付けが終わるころには、日がくれていた。かばんを持って校門へと駆け出した。

蘭はすでにそこにいて、待ちくたびれたというような顔を俺に向ける。

「悪いな、蘭！…待った？」

「待った？ じゃないわよ！ 先帰っちゃったかと思ったんだから！」

蘭は口を尖らせて、俺の一步前をツカツカと歩きだした。

俺はその後を追いながら
なんとか蘭の機嫌を取り戻そうと言い訳する。

「だってよくみんな食べてばっかで、片付けに時間がかかったままっ
たんだよ。」

蘭が低い声で「食べるって何を？」
と聞き返してきて

「手作りパイの差し入れ。」と手短かに答えた。
すると今度は「誰から？」と聞き返してきて

「テニス部の3年。」
と手短かに答えた。

まだ、蘭の歩調は早いままだ。
全く気難しいヤツだ。

しばらくお互い黙って薄暗い道を歩いた。

その空気に堪えきれなくなった俺は
蘭に甘えるような声で再び言い訳を重ねた。

「……俺がその差し入れマジイって言ったら、なんか怒られちゃって、ほとんど一人で片付けるはめになっちまったんだよ。」

すると蘭が足をピタッと止めた。

いきなりだったので

蘭に合わせて早歩きをしていた俺は
その反動で危うく蘭にぶつかってしまっ所だった。

蘭がこっちを振りかえると、顔と顔の間がかなり近くて
一瞬ドキッとした。

薄暗い道。

外灯のわずかな光に照らされて蘭の顔がぼうっと浮かび上がるように見えた。

「マズイって、新一っ…せっかく差し入れ持ってきてくれた人に、そんな事いったのっ!？」

そう言う蘭の表情に、俺に対する怒りはほとんど見られない。

しかし差し入れのレモンパイを持ってきた麻美先輩への同情の色は、はっきりと見えた。

これだからお人好しは……

「ひどいよ……。」

困る。

そんな自分の事のように悲しそうな顔をされると

「い、ごめん……。」「

なんで俺は蘭に謝ってるんだ？

思わず髪をくしゃくしゃと掻き回しながら苦笑した。

「で、でもよ！俺は蘭の差し入れだったらマズイなんて絶対言わねーぜ？」

「……え？」

蘭の頬にかすかな赤みがかかった。

「お前にそんな事いったら、俺は半殺しだもんな！」

そう言ってニツと悪戯っぽく笑うと

蘭は顔を赤くしたまま眉間にシワを寄せた。

「それどゆゝ意味よ!？」

「そのまんまじゃねーか！」

俺は蘭の拳の気配を感じて

慌てて蘭を追い越して走った。

「ちよっ…待ちなさいよ!新一！」

言えるわけないだろ、お前が作ったものに「マズイ」なんて。

例え

誰かがそう言ったとしても

俺は食べてやりたいと思うだろう。

お前のことが好きだから。

3. お世辞

「ただいま。」

返事はなかった。

靴を脱いで、自分の部屋へ向かう廊下を歩き
途中リビングを覗いた。

毎日家族で囲む食卓の上に
置き手紙を見つけた。

「……あさみへ。」

今日はお父さんと二人で用事がある。

ご飯はビーフカレーを温めて食べてね、との事だった。

カバンをテーブルの上に置いて台所へ向かった。

コンロ上に一つだけある鍋の蓋をとると、言い匂いが鼻をくすぐった。

すぐにでも食べたくなって火をつけた。

ふと目を横にやると

キレイに片付けられた台所の棚に

私が昨日大量に作ったレモンパイが3片

皿の上にラップをされて置いてある。

そのうちの1片は、一口噛じった跡があった。

『なんかマジイッスよ、これ……。』

彼のあの言葉が、再び耳元で聞こえた。

彼、工藤新一君。

サッカー部1年にしてレギュラーに選ばれたという話で
部活生の間では

とても有名だった。

そういえば、テニスの練習中に顔を上げると

ボールを器用に頭の上で何度も突き上げる彼の姿が見えて
感心した事もあった。

「なによっ、上手いからって……少しくらいお世辞でも言ってくれたって……。」

……お世辞？

「やっぱりお世辞は嫌かも……。」

一口嚙じった後
顔をしかめてレモンパイを皿に戻す父の姿を想像すると
悔しくなってきた。

「……よしっ。」

私は熱くなりはじめたビーフカレーの火を止めて
冷蔵庫からレモンを3個取り出した。

4. リベンジ

3年生との練習試合が終わって
全身をつたう汗を拭いながら

新一は水飲み場へ向かった。

後ろから同級生の仲間が新一の後を追う。

「新一！お前やっぱすげえよ！」
「んー？」

「3年、かなりバテてたぜ！お前のパスが上手かったからだよ！」
「そうか？…でも、今日はみんな調子良かったからな」

仲間からの称賛に、新一は「ニヒヒ」と照れくさそうに笑った。

水道の蛇口を上に向ける
一気にひねると

水が噴水のように吹き出て
新一の顔を濡らした。

水分補給と同時に汗を洗い流して水を止めた。

頬に滴る水滴を
顔をぶんぶん横に振って、ふき飛ばす。

ふと顔を上げると、新一の目の前に麻美の姿があった。

「あ！麻美先輩じゃないですか！」

新一より先に、隣の奴が声を上げた。

麻美は、彼にニッコリと微笑んで軽く頭を下げた後再び新一を見る。

そして、新一に

白いタオルを差し出した。

「はい」

新一は、きょとんと不思議そうにタオルに目をやり

「……どうも」

といぶかしげにそれを受け取った。

麻美は、もう一人にも同じタオルを渡し、愛想良い笑顔を見せた。

新一は、麻美から受け取ったタオルで

濡れた顔を拭いた。

拭きながら、昨日蘭が言った言葉を思い出していた。

『マズイって、新一っ…せっかく差し入れ持ってきてくれた人に、そんな事言ったのっ!？』

「……あのっ…」

新一と麻美の声が被った。

何となく気まずい空気が流れた。
その空気を察してか

「……俺、先行ってるな、新一！」

と一人、その場からそそくさと去っていった。

二人きりになり、しばらく沈黙が続く。

「あの…工藤君……」

麻美が先に口を開いた。

しかし彼女は、その後の言葉に詰まった様子で
視線を泳がせたりしている。

しばらくして、意を決したようにまっすぐ新一を見つめて
背中に隠していた小さな紙袋を彼に差し出した。

新一は、狐につままれたような顔をして紙袋を見た。

「……何スカ？これ……」

「……レモンパイ」

「えっ？」

訳が分からない新一は、差し出された紙袋を受け取って中身を確認した。

カサツという乾いた音の間に
1片のレモンパイが見えた。

「かつ、勘違いしないで！昨日、工藤君にマズイって言われたから
悔しくて……また作ってみたの」

「あっ……すいません、俺っ……」

「いいの！正直に言ってもらえるほうが有難いんだから」

「昨日は言い過ぎた」と言いたかったのだが

麻美の素直な笑顔に、新一は安心して、口元が緩む。

「今日のは自信作よ！もうマズイなんて言わせないからね！」

麻美はわざとオーバーに
得意気な顔を作って見せた。

「今食べてもいいですか？」

「えっ……」

麻美が答える前に

新一は紙袋に手を突っ込み

大きく一口、レモンパイを頬張った。

リベンジの自信作。

「……どう？」

自信作と言ってはみたが

やはり思い返せば

手を抜いた所もあった気がする。

だって、昨日の夜から作ったんだから。

なんていう言い訳を考えながら

麻美は新一を食い入るように見つめて、感想を待つ。

「……うん……」

新一は、一口をゆっくり噛みしめながら
首を傾けた。

「なにそれ〜！不発!？」

「ん〜…」

「工藤君、どうなのよ!？」

新一は

二口目でレモンパイすべてを口に押し込めて
頭を掻きながら答えた。

「なふは、はひはひほー……」

「何言ってるか分かんないわよ！」

待って、と手でジェスチャーしながら
口元を忙しなく動かす。

ようやく口に隙間ができてきた。

「パイ生地が重くて、……なんかパサパサしてて小麦粉の味が残っ
てて……」

「……もういい。分かったわ、基本からやり直してみたいね」

麻美は苦笑いして肩を落とした。

「いや、でも食べなくてはいいっスよ」

「……今更フォロー？」

口元にパイの皮を残す彼のあどけない表情に
気が抜けた。

「俺レモンパイ好物なんで、人よりうるさいんです」

そういつて白い歯を見せて、彼は笑った。

その日の放課後

麻美は近くのスーパーでレモンを二袋買って帰った。

5. 意識

三度目の正直が過ぎ
今日、四度目。

「……どう？」

「……うーん」

「えー?? 本当に!？」

「なんか舌にねちょねちょ……」

「もういい! 分かった! またやり直すっ」

「でも食えなくはないっスよ」

「……」

私が黙り込んで頬を膨らませると

工藤君はクスクスと笑った。

ムツとして今度は眉間にシワを寄せる。

「……次で絶対成功させる!」

「お願いしまーす。」

彼は

私の言葉に期待してないみたいな返事をして
サッカーボールと戯れだした。

その時ふと思った。

その時ふと思った事が口に出た。

「ごめんね、迷惑…だよね……」

しまった。

こんな事言われるほうが余計迷惑だ。

「迷惑だったら迷惑って言いますよ、俺。」

工藤君はそう言って

壁に向かってサッカーボールを強く打ちつけた。

跳ね返ったボールを

上手く胸で受けて

リフティングをし始める。

「上手」

ボソッと声に出したけど

工藤君には聞こえてたみたいで

私の方を見て、彼はニカッと笑った。

「ありがとう」

今度は聞こえないように
小さな声で囁いた。

□

「麻美っ、お疲れ！」

「あ、由香。お疲れっ！」

日が落ち始め、辺りが薄暗くなった放課後。
私が体育館を出ようとすると
部員の由香が後ろから私の肩を叩いた。

「今日、塾ないんだ！久しぶりに一緒帰ろっ！」
「本当？やった！」

帰り道が一緒に

少し前までは、毎日由香と下校していた。

お互い3年生になり

私より一足早く受験を意識し始めた由香は
今年4月から、塾に通い出した。

それから、一人で帰る事が多くなった。

「本当に久しぶり……なんか嬉しいな」

「ごめんねっ、あたしが塾入ってから、麻美一人で帰る事になっちゃって……。」

「何言ってるのよ！別に謝る事なんてないでしょ？」

「……ん」

「……それに、こんな早くから受験意識して……偉いじゃない！」

「そんなんじゃないよ……」

由香は決まり悪そうに笑った。

「あたし……頭悪いからさ！今からやってないと心配で……」

「でも由香、定期テストの点数良いじゃない！」

「あれは付け焼き刃みたいなので……でも麻美はすごいね！部活でキャプテンしてても勉強しっかりやってるし、模試も点数良いし、美人だし……」

「そんなに褒めても何もでないわよ？……あ、でもレモンパイなら出せるかも。最近よく作るから、たくさん余ってるの」

久しぶりで、由香は緊張していたのだろう。

私が笑うと、由香も恥ずかしそうに笑った。

「ねっ、麻美っ、1年のサッカー部の子と仲良いの？」

「え？工藤君の事？なんで？」

「やっぱり！噂になってるわよ？麻美とその子がよく隠れて一緒に

いるって」

「別に隠れてるわけじゃ……」

「もしかしてっ……何かモーションでもかけられてるの!？」

「違っ…むしろその逆……」

言いかけて、私は口をつぐむ。

「逆って…じゃあ麻美っ……!」

「違う違う違うっ!ただ私はっ……」

理由を、由香に説明した。

「……で、悔しくてさ。絶対美味しいって言わせてやる!っと思
って、レモンパイをよく工藤君に持っていったの」

「……ふうん」

「……考えてみたらバカみたいよね、私」
「うん」

きっぱり由香に同意され、思わず苦笑した。

由香はしばらく考えこんだ様子を見せて
思い立ったように私を見て言った。

「麻美さ、工藤君の事好きなんじゃないの?」
「えっ!?!」

由香の言葉に驚いて足を止めた。

「だって……ふつう悔しさだけで1ヶ月も通う？」

ドキッとした。

私の事ながら、由香の言葉に「確かに…」と納得する。

「でも、今までそんな事一度もっ……」

でも、今までそんな事一度も考えた事なかった。

足元を見つめながらゆっくり歩きだし
しばらく一人で考えこんでいると

「あっ！あの子！」

由香の声に顔を上げる。

私たちの20メートルくらい先を歩く
工藤君の横顔が見えた。

その隣には、髪が肩くらいまでかかった女の子が並んで歩いている。

楽しそうに笑い合いながら

二人は通りすぎていく。

「麻美……あれ彼女かな？」

「さあ……？」

「え！？何よあの男！彼女いるってくらい言っときなさいよね！」

「ちょっと由香！別に工藤君に彼女がいてもいなくても私には関係無いわよ！」

私は怒った様子の由香を笑い飛ばした。

でも、なんだろう。

胸が苦しい。

腕立て伏せしすぎたかな。

6. プレイボーイ

朝、教室に入って新一は窓際の席に向かう。

彼の机の上には週刊誌「プレイボーイ」が置いてあった。

「ヘーイ、プレイボーイ！」

新一のすぐ前の席の山崎が、ニヤニヤ笑いながら振りかえる。

「まさか今日も女を朝帰りさせたなんて事はねえだろうな？」

「…どうゆう嫌がらせだよ」

新一は乾いた笑みを浮かべて席についた。

この山崎という男、勉強はできないくせに、

中1という年代にしては大人の知識を無駄に蓄えている。

「しかも年上の女……」

この一言で、勘の良い新一には山崎が考えている事の察しがついた。
しかし、あえて何も言わず

目の前の雑誌をパラパラと捲り、目を通すふりをする。

「3年の内田麻美先輩」

新一に近づき、声をひそめて呟くように言う。

「…どうだった？」

「どうってお前なあ……」

山崎のその不健全な問いかけには呆れて、新一はため息まじりに苦笑いする。

が、突然パツと真顔になり、ニヤツと笑って山崎の耳元で言った。

「最高」

「マジか!？」

思わず立ち上がった悪ガキの頭を
新一は勢いよくひっ叩いた。

「いってー!」

「バーロー!お前の妄想に付き合ってるほど暇じゃねえ!」

「ノリノリだったじゃねえか!」

いきなり立ち上がった2人は
クラスのみんなの視線を感じ、静かに座り直した。

「…で、マジなのか？」

「マジなわけねえだろ！中学生が何言ってるんだよ」
「まあまあ、そっちじゃなくてよ…」

付き合ってるのか？と問いかけてきた山崎に
新一は「まさか」と、笑った。

「でもしよっちゅう部活抜けて会ってるんだろ？」
「いや、それは…」

山崎に事のいきさつを説明する。

「な〜んだ！そんな事かよ！」
「ああ」

「普通はマズイなんて言ったら嫌われそうだけどなあ。運の良いやつだなお前は」
「ははは…」

まあな、と苦笑いしてチラッと時計に目をやる。

「俺はてっきり毛利のやつと二股でもかけてると思ったぜ」
「なっ、何言ってるんだ！あいつとは別に何もっ…」
「でも毎日2人で登下校〜」
「家が近いからついでだったの！」
「へいへい」

山崎は新一の訴えを流し、大きくため息をついて言った。

「でも羨ましいよな〜！あの麻美先輩が…こんなやつのためだけにレモンパイを…」

「…んな大袈裟な」

「超美人だよな！俺、朝会とかあるたびに興奮しまくり！」

「…お前が言うとりアルだよな」

「俺も生徒会入ろうかな〜副会長狙おうかな〜」

「俺はぜってー投票しねえけどな」

麻美は、帝丹中学の生徒会長である。

才色兼備とは、まさに彼女のためにあるようなものだ。
レモンパイ作りの腕は除いての話だが。

新一は山崎を無視して

目の前の雑誌に目を通し始めた。

すると山崎は思い出したように身を乗り出して言う。

「そうだ！この本の袋綴じ超ヤベエの！」

「マジかよ！何ページだ!？」

「確か…」

山崎が雑誌を取ってページを捲り始めた時
背後からの手がそれを取り上げた。

「誰です、学校にこんなもの持ち込んでいるのは？」
「げっ…」

山崎は明らかな動揺を見せるが
新一は他人のふりをして国語の教科書を広げる。

眼鏡をかけた、つり目の女教師が
2人を睨む。

「……あとで職員室にきなさい」

女教師は雑誌を脇にスツと挟み入れた。

新一と山崎を嘲笑うかのように
「プレイボーイ」の文字とその中の袋綴じが遠ざかってゆく。

そうして雑誌は女教師と共に
きらびやかに教室を出ていった。

同時に鐘が鳴り、「朝の読書」の時間が始まる。

山崎が「完全なエロ本じゃなくて良かった」と胸を撫でた。

新一はとぼっちりをうけ、苦い顔のまま推理小説を開く。

「悪のりするんじゃないかなかったぜ……」

後悔しても、後の祭りである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2940c/>

レモンパイ

2010年10月12日05時56分発行